

古文書倶楽部

作庭家長岡安平の 「千秋公園設計参考図」

長岡安平は、明治から大正にかけて全国的に活躍した作庭家で、近代公園設計の先駆者として「祖庭」と号しました。東京の芝公園をはじめ全国各地の公園を設計しました。

長岡は、明治十年（一八七七）に東京府の土木掛に採用されて以来、府内の飛鳥山公園や坂本公園（現坂本町公園）などの設計で実力を認められていました。その長岡を見込んで、明治



四阿（あずまや）の図

【発行】

秋田県公文書館
2012.1
第45号

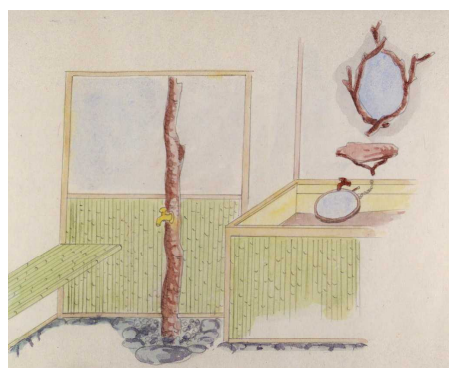
当館二階のビデオルームでは、秋田県の県政映画の好きなものをDVDで視聴できます。昭和三十年代以後の懐かしい映像がたくさんありますので、御利用をお待ちしております。

二十九年（一九九六）、秋田県が県公園（久保田城跡）の設計を依頼しました。坂本公園に次ぐ大規模な公園で整備に三年の年月と一万八千円の費用が投じられました。完成した県公園は「千秋公園」と命名され、地元はもとより全国的に評判を呼び、作庭家長岡安平の名声を不動のものにしました。その後、全国各地から長岡に公園の設計依頼が寄せられています。

公文書館では、長岡が県に提出した「千秋公園設計参考図」（県C一六〇四一一、二）を所蔵しています。長岡が趣向をこらしたデザイン画の数々を収録しています。門、垣根、四阿（あずまや）、観月台、

橋、山道、石灯籠、噴水、行路樹、動物鳥類飼育場、喫茶店、便所、下水で計五五枚の画が描かれました。これらを見ることで、整備当時の千秋公園の情景が想像できます。

長岡式便所（洗面場）の図



上段の画は、長岡が設計した四阿の一枚です。長岡は、趣向の異なる四阿のデザイン画を四枚描いています。写真の四阿は、粗朶葺き屋根



猿の飼育場の図

に、自然木をあしらった柱と柵が特徴です。他には杉皮葺きや柿葺き屋根、唐傘型屋根などの四阿もデザインしています。一方、長岡は、喫茶店や便所の建物も数寄屋風に設計し、公園の樹木や庭石、四阿と調和するよう工夫しています。「長岡式便所」と名付けられた建物は、茶室を思わせる外観のほか内部も数寄をこらしています。中段の画は洗面場の内部で、鏡を木の枝で縁取り、水道は自然木に仕込まれています。さらに興味深いのは、公園内に鶴や小鳥、猿の飼育場が設けられたことです。下段の画は、「猿猴飼育場構造図」で、猿山と水遊び場を設け、まわりを金網で囲っている様子が分かります。鶴の飼育場には小池と木立、小鳥の飼育場には小さな林が設けられています。

長岡は、金勝寺山公園（秋田市）、横手公園（横手市）などの他、池田家庭園（大仙市）など個人宅の庭園も数多く手がけています。

【柴田知彰】

※参考文献『祖庭長岡安平』（東京農大出版会）

古文書こぼればなし

開国か攘夷か

―幕末桂城文人狩野良知の『三策』―

時は幕末、いわゆるウエスタン・インパクト（西欧諸国の衝撃）の動きが愈々顕在化し、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーは軍艦四隻を率いて浦賀に来航、フィルモア大統領の国書を提出して開国を求めて以来、国内は開国か鎖国かを巡って大騒動になりました。こうした混乱は米国のハリスが、これまでの和親条約から実質的な交易を開始するための修好通商条約の締結を迫るに至って頂点に達し、国内の政治的変革運動ともからんで政局は極めて不穏な様相を呈する中、大老井伊直弼の命を賭した決断により日本（幕府）は開国に舵を切りました。

ここで紹介する『三策』は、このような激動する社会の中で、秋田藩大館所預の家臣狩野良知が策定した対外政策論です。多少の説明はさておいて、まずはその概要を吉田松陰も教鞭を取った松下村塾で使用され、明治元年（一八六八）に公刊され、同二年に再版されたもので見ること致しましょう。

45号 まず冒頭の部分から。「外国の交阿蘭（オランダ）が久し。癸丑（嘉永六年、一八五三）以来一華盛頓（ワシントン）に通じ、再び英吉利（イギリス）に接す。俄羅斯（オロス）は未だ報ずるに及ばずして諸蕃の貿易を事とするもの。又昌に帆檣（はんしょう）相望みて至らんとす。今又華盛頓使を遣わし夷官を都府に居き以て懋

遷（ぼうせん）を埋め便地に港を開き以て互市を広めんと請う。一中略一 將に何の術以て之に応ぜんとする哉。曰く古今の変を稽（かんが）え天下の勢い察し以て当今の計を為すに三策あり。」で始まり、具体的には上策、中策、下策に分けた上で次のように記されております。「何をか上策と謂う。内国民撫し外遠人を

服し信を通じ援を結び有無を交易し水師商舶四方に往来し、以て万国の形勢を洞り夷慮の情義を采し弱きを兼ね味きを攻め幾を見て以て動くは神州の威が殊方異域を被所以也。何をか中策と謂う。边防を戒め甲兵を練り封港の禁を厳にし一切外交を謝絶し、寇来れば則ち邀戦し、去れば則ち固く守るは、東海に独立所以にして庶幾わくは以て国祚を保つに足る也。何をかを下策と謂う。進みて地を略むる能わず退きて自ら守る能わず。夷慮の恐喝を受けて恫疑畏惰（どうぎいだ）、僥倖以て一日の安くを偷むは、国勢振わざる所以にして日に委靡（いび）に趨く也」と論じます。そして良知はこの三策の得失を考究した上で結論としては、上策が一番であることを述べるわけです。

狩野深蔵稿『三策』明治二年版（資料番号AH3121284）



「良く上策を用うれば、則ち土を啓き国を富まし皇（すめら）神州の威を張り、皇祖日神の在天の光將に珠方異域を被わんとす。」がこれです。まさに当時の対外情勢への対処の仕方について意を尽くして論考した卓論で、当時是一世を風靡した尊王攘夷論を凌駕した尊王開国論と申せましょう。

この三策が伊藤博文、山県有朋、井上馨など明治の元勳が若かりし頃に吉田松陰から薫陶を受けた松下村塾の蔵書、しかも著者は狩野深蔵（良知）と明記して明治元年に公刊されたところから、三策は嘉永五年（一八五二）松陰が東北の著名人との交流の旅の折りに（大館には二月二十七日）良知から開示を受け、その内容に感激した松陰が松下村塾での講義の教材としたとも言われますが、ペリー来航はその翌年の嘉永六年であり、良知も三策の冒頭で癸丑（嘉永六）以来と記していることなどから、松陰来訪の時点ではまだ未稿だったと思われる。三策が松陰の目に止まったのは、もしかしたら良知が江戸の昌平黌へ留学した時かも知れません。狩野良知の「三策」は明治維新の本源の一つを成した長州においては高く評価されたわけです。

それでは、「三策」は本藩ではどのような評価を受けたのか。実はそれが分からないのです。幕末維新期の大館では良知や弟の旭峰をはじめ多くの優れた文人を輩出しました。桂城文人とも称される逸材たちを秋田藩当局はどのように処遇したのか。興味深い問題です。

最後に狩野良知は「千秋公園」や秋田魁新報の前身である「遐邇新聞」の命名者であることも付け加えたいですね。

【渡部紘一】